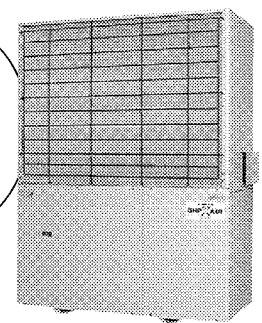




大阪ガスとヤンマーは セレッソ大阪のCO2削減活動を支援しています！

CO2削減 &
節電の切り札
ガス冷暖房
システム



高効率 ガス冷暖房システム
ガスヒートポンプエアコン (GHP)

知らず知らずのうちに排出しているCO₂。セレッソ大阪のゲームも例外ではありません。試合を見に来られた方が移動に使う交通機関から出るCO₂、スタジアムの照明を使うことによるCO₂。しかし、CO₂を排出するからといってサッカーをなくしてしまう世界を、わたしたちは望んでいません。排出したCO₂は減らせばいいのです。

セレッソ大阪は、大阪ガスとヤンマーのサポートを受けて、2012年度「CO₂ゼロチャレンジ」を実施します。

「CO₂ゼロチャレンジ」とは、セレッソ大阪のホームゲームで排出されたCO₂を、大阪市内の中小企業等がガスヒートポンプエアコン (GHP) 等の高効率ガス冷暖房機器等を導入して削減したCO₂で、オフセット (相殺) するプロジェクトです。

GHPは、ガスエンジンでコンプレッサーを回し、ヒートポンプ運転によって冷暖房を行う空調システムです。技術開発により、CO₂排出量が27%も削減できる(※1)など、環境負荷の低減に役立つとともに、電気をほとんど使わないので、節電対策としても有効です(※2)。

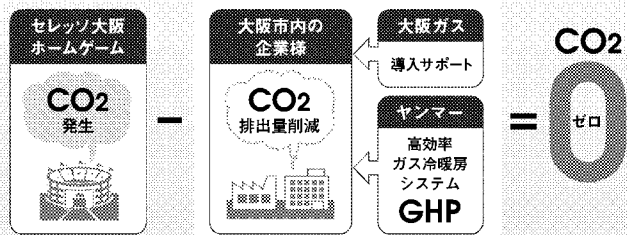
大阪ガスとヤンマーは、国内クレジット制度(※3)を活用し、大阪市内の企業における高効率ガス冷暖房機器等の導入を支援、セレッソ大阪の「CO₂ゼロチャレンジ」を応援しています。

温暖化防止を大阪から。
熱い試合を快適な環境で楽しんでいただくために。

※1: 1997年比 (ヤンマー製品比較)

※2: 同一容量の場合、消費電力は電気空調の約1/50です。(大阪ガス調べ) オフィスビルにおける電力消費量の28%が空調に使われています。(省エネルギーセンターホームページより)

※3: 大企業の技術・資金等を提供して中小企業等が行った温室効果ガス排出抑制のための取組みによる排出削減量を認証し、大企業等が自主行動計画や試行排出量取引スキームの目標達成等のために活用する制度



□本件に関するお問い合わせ先
大阪ガスホームページ <http://home.osakagas.co.jp/info/info.html>

クリーンエネルギー革命始まる

水素社会 幕あけ



液体水素の流通増 圧縮ガス比 輸送量10倍

水素を燃料とし、走行による排出ガスや二酸化炭素(CO₂)を一切出さないFCVは究極のエコカーと呼ばれる。このFCVの実用化は、実は自動車の環境対応を意味するだけではない。FCVの意義は水素をエネルギー源として利用する初めての本格的なアプリケーションであるといふ点にある。このFCVの普及

供給の形態も多様だ。一般的なのは気体による供給で、産業用では圧縮だけでなく、供給場所での製造と供給を兼ねる場所で行うオフサイト供給もある。FCV向けの水素ステーションでも、輸送を省くことで仕上りのコストを抑えることができる。(杉山修大阪ガスエンジニアリング)

日本最大の液化水素工場である、岩谷産業のハイドロエッジ(堺市西区)に排出するカロリー当たりのCO₂が減少している。つまり水素はその究極の姿に他ならない。多種多様なソースから製造できるのも水素の利点と言える。現在、国内で製造されている水素は年間150億立方メートルを大きく超えるが、市場規模はその1%ほど。実は大半が製造所や製鉄所などで副産物として発生し、その場で自家消費されている。それ以外では天然ガスやメタノールなどの化石燃料の改質や、水の電気分解で製造することでもできる。また有機物の分解や、太陽光や風力の発電による電気分解による製造も可能で、循環型エネルギー社会の実現にもつながる。

FCV実用化へ前進 「エネファーム」好調

11年12月に開催された東京モーターショー。次世代環境車として電気自動車(EV)が脚光を浴び、スマートハウスの連携なども注目された。そのEVの陰に隠れがちではあったが、FCVも実用化への動きが着実に前進していることを示した。その代表がトヨタ自動車が出展したFCVのコンセプトカー「FCV R」。70ガルの高圧水素タンクを搭載し、約700キロの航続距離を達成した中型セダンで、15年ごろの市場導入を検討しているという。

FCVの普及には、水素の供給体制の整備が不可欠だ。水素は、天然ガスやメタノールなどの化石燃料の改質や、水の電気分解で製造することでもできる。また有機物の分解や、太陽光や風力の発電による電気分解による製造も可能で、循環型エネルギー社会の実現にもつながる。

水素社会の到来へ向けて、いよいよカウントダウンが始まった。自動車メーカーや水素供給事業者などが2015年に燃料電池自動車(FCV)の市販開始を目指す共同声明を出したのが1年あまり前。一方で家庭用燃料電池システム「エネファーム」は、一足早く商品化。東日本大震災後に分散電源へのニーズが高まったことも反映し、予想以上の売れ行きとなっている。本格的な水素社会を見据え、スマートコミュニティなどで水素の役割をどう位置づけるかも将来の課題だ。

に排出するカロリー当たりのCO₂が減少している。つまり水素はその究極の姿に他ならない。多種多様なソースから製造できるのも水素の利点と言える。現在、国内で製造されている水素は年間150億立方メートルを大きく超えるが、市場規模はその1%ほど。実は大半が製造所や製鉄所などで副産物として発生し、その場で自家消費されている。それ以外では天然ガスやメタノールなどの化石燃料の改質や、水の電気分解で製造することでもできる。また有機物の分解や、太陽光や風力の発電による電気分解による製造も可能で、循環型エネルギー社会の実現にもつながる。

イワタニの
液化水素

99.9999%
以上の超高純度

小さく運んで、大きく使う、液化水素のこれから。



ガス&エネルギーで未来を拓く

Iwatani
岩谷産業株式会社

大阪本社 〒541-0053 大阪市中央区本町3-6-4
東京本社 〒105-8458 東京都港区西新橋3-21-8
<http://www.iwatani.co.jp>

水素&液化水素のご用命は、イワタニへ。
水素ガス部 ▶大阪 TEL 06-7637-3458 ▶東京 TEL 03-5405-5932